女社長に乾杯！

赤川次郎

上

新潮文庫

昭和五十九年十月十五日　印刷
昭和五十九年十月二十五日　発行

著者　赤川次郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・憲専堂製本株式会社
© Jiro Akagawa 1984　Printed in Japan

ISBN4-10-132702-5 C0193

新潮文庫

女社長に乾杯！

上　巻

赤川次郎著

新潮社版

目　次

ある曇った朝突然に……七
新社長第一日……六五
即製キャリア・ウーマン……一二〇
犯罪の裏には……一五七
試練のとき……二二四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

女社長に乾杯！（上巻）

ある曇った朝突然に……

「おっ！」
湯呑み茶碗を覗き込んだ荒井定市は、目を見張った。荒井家の朝食は純和風と決まっているので、当然日本茶が飲まれるのである。
「どうしたの？」
妻の智子がご飯をよそいながら訊いた。「映ってる自分の顔にでもびっくりしたの？　それなら分かるけど」
智子の言葉など一向に気にならない様子で、荒井は嬉しげに茶碗を妻の方へ差し出しながら、
「ほら、見ろよ。茶柱が二本も立ってるぜ。今日は朝からツイてるよ」
智子はまるで取り合わずに、
「早く食べなさいよ。遅刻するわよ」
と冷たく言い放った。
「分かってるよ。しかし、悪くないじゃないか、朝からさ。茶柱が……それも二本だぜ」
と茶をガブリと一口、朝食に取りかかった。純和風の朝食、という意味は、つまり日本旅

館のそれに近い、ということであって、従って今朝のメニューは目玉焼き、のり、インスタントみそ汁、ご飯であった。

荒井家の朝食がユニークなのは、メニューに一年中ほとんど変化がない、という点だ。

「あれ？」

目玉焼きにはしをつけようとして、荒井はまたびっくりしたような声を出した。「どうしたんだい、今朝は？　二つも焼いたのか？」

「たまたま双子の卵だったのよ」

「そいつはいいや！　やっぱり今日はツイてるぞ！」

荒井は幸せ一杯という様子で食べ始める。智子はそれを眺めて、やれやれというようにため息をついた。

「これで出世するわけはないわよね」

荒井はすでに四十八歳になっていた。三十五歳で係長になってから、十三年の間、同じポストに居座っている。新しく入った社員など、〈係長〉というのが彼の名前なのかと思っている者があるくらいだ。

智子は四十三歳。一人息子もやっと高校へ――金のかからない都立へ――入って、ホッとした所。そろそろ〈女として、私の人生はムナシカッタノデハナイカ〉などということを考えるヒマの出来始める頃である。

「さて、これから少し私も自分の好きなことをやらなきゃ！」

と鏡に向かって言ってみても、それにはやはり多少の元手がかかり、それには亭主の給料は決して充分とは言えなかった。

荒井は元来が、人の善いのが取り柄の男で、およそ出世欲とか金銭欲に乏しい人間なのである。

智子は、頭の禿げ上がった、メガネの奥で小さな目が、えらくひんぱんに瞬きをくり返している夫が、新聞片手に目玉焼きを突っついているのを眺めながら、出世が無理なら、休日にアルバイトにでも出てもらおうかしら、などと考えていた。

「――ん？」

荒井は、ふとはしを持つ手を止めた。じっと新聞の一隅に目をこらしている。

「待てよ……こいつは……」

「何をブツブツ言ってんのよ」

「もしかすると……」

荒井は何だかわけの分からない独り言を呟きながら席を立つと、奥の部屋へと新聞を持って入って行った。――何やってんだろ、あの人？

智子がいぶかしげに見ていると――

「おい！　やったぞ！」

荒井が突然大声を上げて飛び出して来た。

「な、何よ、大声出して！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

気でも狂ったのか、と思った。
「見ろ！　当たったんだ！　宝くじが当たった！　この間、会社の奴から売りつけられたのが当たったんだ！」
荒井は今にも踊り出さんばかりだ。さすがに智子の顔色が変わった。
「ほ、本当？――い、いくらなの？」
声が思わず震える。
「見ろ！　千円当たったんだ！　たった二百円の券で千円も――」
智子の顔色がもう一度変わった。

「純子、起きなさい！」
眠りたいという潜在的欲求は大したもので、母親がめくろうとした毛布へ、純子はまだ半分――いや四分の三は眠り込んだまま、しがみついた。
「お願い！　あと十分！」
「だめですよ！　もう今だって遅すぎるくらいなのに」
母は無情に毛布を引きはがすと、「さあ、顔を洗って！　一体いくつになったのよ？」と尖った声で純子をつついた。
「二十一じゃんかあ」
パジャマ姿でベッドから這い出して来ると、純子はカーペットの上にゴロリと横になって、

「おやすみ……」
「いい加減にしなさい」
母の声がそろそろ険悪になって来たと見ると、純子は仕方なくフラフラと立ち上がる。
「イテテ……。頭痛で休む」
「二日酔いでいちいち会社を休んでたらね、会社は潰れちゃいますよ」
「ああ……。冷たい母親ねえ」
「自分が夜遊びばっかりしてるからいけないのよ」
と母は階段を降りながら、「五分以内に降りてらっしゃい！」
と声をかけて来る。
「熱いコーヒー！」
「はいはい」
純子はブルブルッと頭を振って、
「ゲシュタポ！」
と母のいたあたりへ舌を出してみせ、それから大欠伸。――花のＯＬ一年生も、これでは台無しである。
竹野純子。短大をこの春卒業。即家事見習。即結婚。――といけば楽だったのだが、残念ながら見合いの話もどれもこれも帯に短し……というわけで、やむなく就職。
従って純子にとって会社とは結婚相手を捜すための媒体にすぎないのである。とはいえ、

父の知人の口ききで入社したので、どうもロクなのがいませんから、と辞めるわけにもいかず、もう三カ月も勤めている。

純子にとって同じ事を三カ月続けたというのは、遊びやボーイフレンドも含めて、人生始まって以来の出来事であった。

五分、とはいかなかったが、七分三十秒後には、竹野純子は、スラリとした肢体をシンプルな柄のワンピースに包んで食堂に現れた。——美人である。

若い女性は、その若さだけで、三分の二は美女であるが、純子の場合は本物だ。短大在学中に、モデルにならないかと誘われたのも再三と自称——実は一度だけだが——するのもあながち無理ではない。

クリッとした目のあどけなさ、えくぼの浮かぶ頬の線の色っぽさ、男の目を一瞬引きつける派手やかさが純子には具わっている。

「真面目にやっとるか？」

父が苦虫をかみ潰したような顔で、コーヒーを飲みながら言った。

「真面目にやるも何も、お茶出しとコピーだけよ、仕事なんて」

「それとおしゃべりだろう」

と父が付け加える。「全く、うちの社でも女の子はしゃべってばかりおる。よくまあ飽きないもんだな」

「仕事を与えないからよ。お茶くみ、コピーだけじゃ、女性の知性を馬鹿にしてるわよ」

「お前なんかに何もできんじゃないか。タイプもソロバンも。ええ？」
父は経済紙を手に取りながら、「全く、お前に給料を払っている会社に同情するよ」
と言った。
「あんな安月給、聞いたことないって、みんな言ってるわ。保険会社に入った並子なんかさ――」
と言いかけるのを、
「他人の芝生は何とか、ってやつさ」
とすかさず遮って、「楽をして給料をくれる所なんかあるもんか」
「あら、そんなに会社って平等にできてましたっけ？」
父は取り合わず、紙面を目で追いながら、
「おや、あそこが倒産したのか。ふーん」
と首を振った。
「有名な会社ですか？」
と母が訊く。
「いや、大企業ってわけじゃないが、ちょっと知ってる男がいてな。気の毒に」
「大変でしょうねえ、急に収入が途絶えちゃうんだから」
「ね、倒産したら社員はどうするの？」
と純子が訊いた。

「まあ……会社を再建するかどうかによるな。お前みたいな下っぱはまず人員整理でどうせクビだ」
「そう！」
純子が楽しげに言った。「じゃ、もう会社に行かなくていいんだ。――うちも潰れないかなあ」
純子としても、ほんの冗談のつもりであった。

「純子さん！　結婚して下さい！」
鏡に向かってなら、スンナリ言えるんだがなあ……。
山本将之はネクタイを締めると、ため息をついた。昨夜もついに言い出せずじまいだった。まあ他に社の女の子が三人もいたのだから、どのみち無理ではあったのだが。
山本は、純子が四月に入社して来た時から――厳密に言えば事務所の入り口を彼女が一歩入って来たその瞬間から、コロリと参ってしまったのだった。
以来三カ月間、山本は純子こそが自分の妻に相応しい女性であるという信念を固く固く固めて来た。今やそれはダイヤモンド並みの硬度に達しているに違いなかった。
だが、その信念は、自分が純子の夫に相応しいかどうか、という点は全く無視していて――つまり山本の頭にはそこまで考える余地が残されていないほど、〈純子〉がぎっしり詰まっていたわけである。

山本はせっせと髪にクシを入れ、出社の支度を急いでいた。――地方から上京して来て、アパートに一人暮らしのせいで、かなりずぼらな生活が身についてしまっていたのだが、純子を知ってからは一変し、部屋は毎日掃除するし、カーテンを取り替え、ワイシャツは二日に一度替え、下着は毎日替えるようになった。それまでは……言わぬが花であろう。

「さて、行くか」

八時二十分だった。会社からそう遠くないので、こんな時間に出ても結構間に合うのである。

背広を着込み、もう一度鏡の前に立って、ネクタイの歪(ゆが)みを直し、

「ウム、なかなかいい男だぞ」

誰も言ってくれないから自分でそう言って部屋を出る。

客観的に言って、山本をいい男だと見るためには、足を長くのばし、腹の出っ張りを削り、真ん丸な顔を叩いて長目にこね直し、目はほぼ倍ぐらいの大きさにして……要するに遊園地のマジックミラー――あの歪んだ鏡が必要であった。

山本は、今日も純子に会えるという、それだけを楽しみに、会社へ向かうバスに乗り込んだ。押し込んだ、と言った方が正確な、猛烈に混(こ)んだバスである。

山本将之は二十七歳。私立の大学を出て、一年間「浪人」し、親が「面倒みきれん」と仕送りをストップしたので、やむなく今の会社へ入った。

こんな風だから、入社後四年たって、当然平(ひら)社員で、三十年たってもたぶん平社員だろう

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com